

伊野川から忠別川までの地名①

前号で、掲載地図のオンネナイ(公式河川名は神居第一線川)が、カムイコタンへ向かう入り口にある支流で、かつ、カムイコタンを含めた支流の中で、オンネナイ(Onne-nay 大きな川)であることをみてきた。

今号からは、石狩川の支流の**掲載地図**のイノペツ(公式河川名は伊野川)から、忠別川との合流点までのアイヌ語地名を見ていくことにする。

恒例により、安政四年(一八五七年)に松浦武四郎が、丸木舟に乗って**掲載地図**のオンネナイからイノペツまでを松浦が持参した**写真①**の野帳(フイールドノート)で見えてみよう。

フン子ナイ
ヨコシナイ
イヌブトー右測也。此処左りの方少

断章 旭川のアイヌ語地名研究

112

高橋 基

し原に成る。此処にてチエツフマレマレと云ふぶゆの如き虫多し。揚花の飛ぶかと思ふ。

幕府への報文日誌の「再篙石狩日誌」では、イヌブトについて、次のように記述している。

此処左りの方は少し平地に成柳原也。右の方測に成たり。其両岸垂柳多し。また其下にチユツフマレマレと云々(かかげ)の如き小さき虫多し。其飛ぶこと揚花の散るかと思わるなり。此辺より水勢も穏やかに成たり。行くことしばしにて、凡(おおよそ)此処までハルシナイより二里と思わる。

イ(公式河川名は伊野第二川)

野第二川)について、昭和三十五年に、知里真志保は、地名解を次のように書いている。

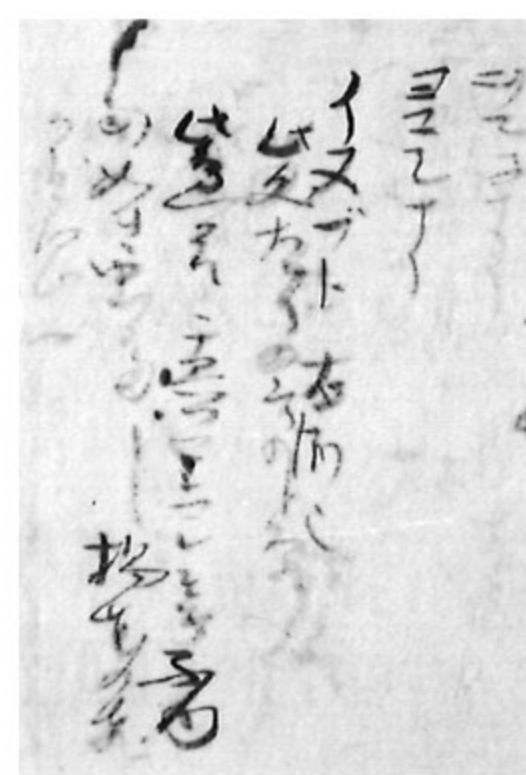
「ヨーコウシナイ」(yoko-us-nay 獲物を狙い・つけている・沢)―急言して「ヨーコシナイ」とも発音する。秋、南方へ移動する鹿の群れをこの沢に待ち伏せして捕ったのでこの名がついた。

鹿はアイヌの人たちの重要な食料であり、冬の履き物の靴や、防寒具などに広く活用された。そのため、右の類のアイヌ語地名は、愛別川・牛朱別川・忠別川にも見られる。

さて、**掲載地図**のイノペツの地名解について、明治二十三年に調査した永田方正は、次のように書いている。

イノペツ(ino-pet=inu-o-pet 漁屋の川)―漁人の仮小屋ある川の義。今、アイヌ略して「イノ」と云ふ。「イヌヌシ」イヌンペツ」等の名処々にあり皆同じ。

①野帳「巳第二番」



畔に作る仮小屋が多い川という意味である。

ところが、明治三十一年七月十六日に、北海道官設鉄道・上川線(現・JR函館本線の前身)が開通する。その時、**掲載地図**の伊納駅が、伊納信号停車場として開業する(二年後に駅に昇格)。そこは未開の地で、停車場の名称の由来になる河川名等も全く無かった。それで、対岸のイノペツ、あるいはそこに架かる伊野橋から、信号停車場名の「伊納」の名称を誕生させたのである。

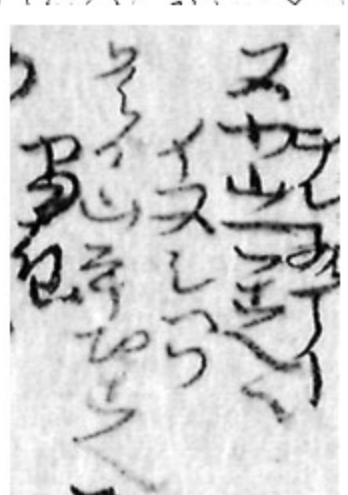
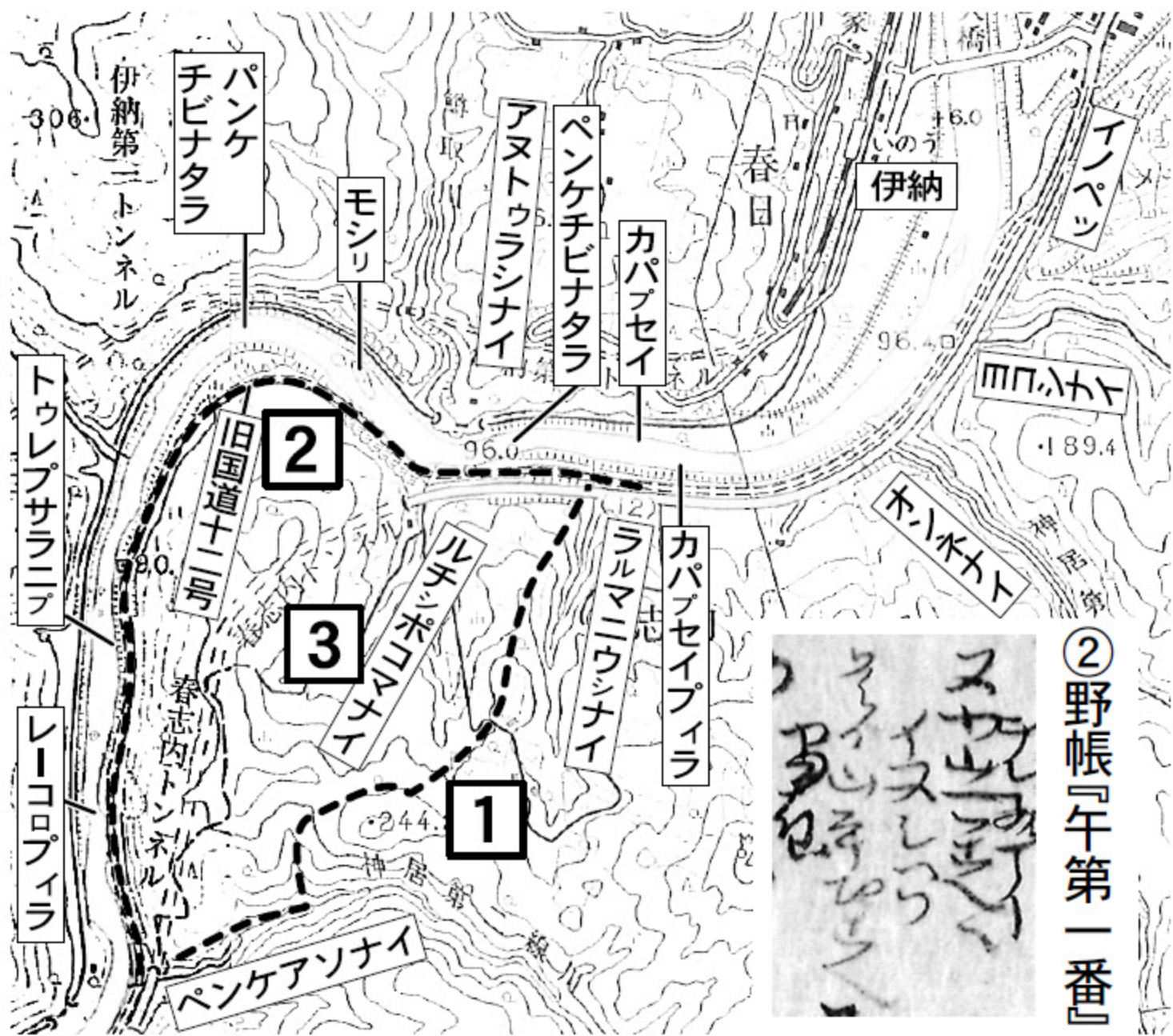
昭和四年、「駅名の起源」が発刊されると、「伊納駅」の起源は、次のように書かれた(その後、版を重ね改訳されているが、根幹は同一である)。

アイヌ語「イノ、ペツ」を採ったもので、(漁者の小舎ある処)を云ふ。昔アイヌが此の附近に漁舎を作ったのに因るものである。(昭和十五年版)

この起源説は、先の永田方正説を採用しているが、**写真②**の安政五年の野帳の「イヌシヘツ」(inu-us-pet 漁のための仮小屋・ある川)も、左岸にあって、右岸には存在しないのである。このように、実在しない幽霊アイヌ語地名にも注意しなければならない。

(アイヌ語地名研究会幹事)

※毎月第1週号に掲載します



②野帳「午第一番」